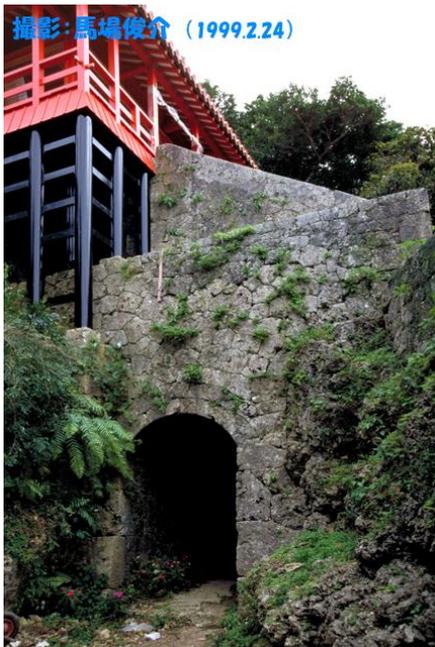


沖縄県

街道 1

わが国に現存する最古の石アーチ橋は下記の天女橋とされているが、それは“どこまでを橋と考えるか”によって異なってくる。グスクの城壁のアーチ門は 14 世紀から出現するがアーチ橋ではない。



撮影:馬場俊介 (1999.2.24)

しかし、末吉宮の本殿と祭場をつなぐ階段状の背の高い石壁に開いたアーチ状の通路は、階段から見れば一種の陸橋であり、現に末吉宮磴道〔とうどう〕橋(那覇市、1456年、県有形) **A** と呼ばれている。これ

を橋と定義すれば、アーチの歴史は天女橋より半世紀近く遡る(市内の世持橋も同年だが改修が大きい)。

石アーチ橋を、水の上に架けられたものに限定すると、天女橋(那覇市、1502年、国重文) **A** がわが国最古となる。1502年は、薩摩による琉球侵攻(1609)以前なので建造時には日本とは全く無関係であった。一方、長崎眼鏡橋が架けられた寛永 11(1634)の琉球は、薩摩の実効支配を受けてはいたが幕府の統治下にあったわけではなく、その時代に



撮影:馬場俊介 (1999.2.24)

完成した長崎眼鏡橋を“日本初の石アーチ橋”と記載することは、当時の日本には琉球は含まれていないため間違いではないが、現在の日本には沖縄が含まれているため、誤解を招きやすい表現である。

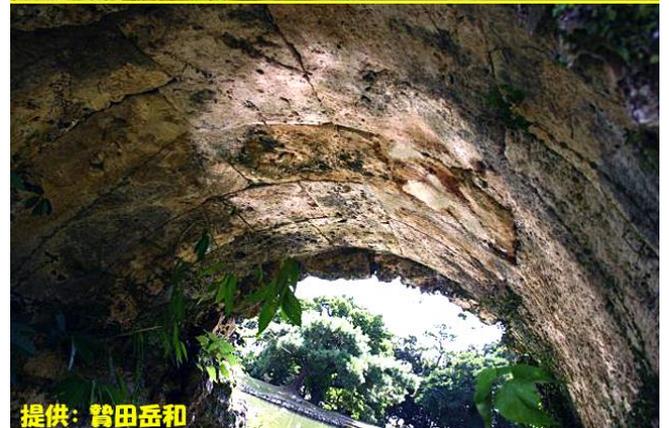
グスクの門は、中国南部特有の駝背型のアーチ形をしており、2つの迫石だけで組み上げられている。古代ローマ期に定型化した“中央に楔石をはめて張力を導入する”タイプと違い、アーチ頂部で石材が切れていることから、一種の合掌式アーチでもある。上記の末吉宮磴道橋も、円鑑池～龍潭への注ぎ口に造られた龍淵橋(1502年頃)も、この形式を踏襲している。同じ駝背型の天女橋は、径間が倍近くあるため4枚の弧状迫石を用いているが、アーチ頂部で石材が切れている点は同じである。ただ、沖縄に残る次に古い石アーチ橋である安波茶橋(浦添市、1597年頃、市史跡) **B** では楔石を有する小型の迫石を用いていることから、16世紀に別ルートで石アーチの技術が入ってきたとも考えられる。

街道 2

識名園の北橋(那覇市、1799年、世界遺産・国特別名勝) **A** は、外観は未加工の自然岩を組み合わせ



撮影:馬場俊介 (2009.3.28)



提供: 鶴田岳和

た特異な石アーチ橋である。しかし、この橋の面白さは、奇抜な外観だけでなく、アーチの迫石の列の一部に2つの列を貫通するような石を挿入する（前ページの下側の写真参照）ことで強度を増すなど、見えない部分も優れている点である。

街道 3

金城町の石畳道（那覇市、1477～1526年頃、県名勝）**A**は、琉球王国の中央集権化に成功した第二尚氏王統の尚真王の在位末期に修築・石畳化されたものである。真珠道の一部として整備された軍事道で、



石畳は坂道にのみ敷設されたと言われる。現存する 238 mの区間は、石灰岩を加工してきれいに敷き詰められている他、沿道の石塀とよくマッチして、沖縄らしい風景を作り出している。

街道 4

辺野古一里塚（名護市、1646年以前、市史跡）**B**は沖縄本島を代表する一里塚である。2基のうち1基は道路工事のため移設・復元されたものだが、拡張された道路を挟んで一里塚らしい雰囲気を留めて

撮影：馬場俊介（2009.3.30）



いる。円筒状の石積みの上に土盛りされているが、解体移設時の調査から、石積みは当初からのものと推測されている。なお、琉球王国の一里塚は、薩摩による琉球侵攻の翌年、慶長 15（1610）に家康から琉球の支配権を承認されたのを受けて、薩摩藩が設置を命じたと言われるが詳細は不明である。辺野古一里塚など当時造られた一里塚は、「正保国絵図」（1646）に位置が記載されている。

街道 5

沖縄は日本一石敢當の多い県であるが、建立年代の判明しているものは本島に1基、島嶼部に2基しか見つかっていない。そのうち本島にあるものが、泰山石敢當（北中城村、1848年以前）**B**である。石

塔には「□山石敢當」と刻んであるが、当初「泰山石敢當」と刻字されていたものを、尚泰王（在位：1848-79）の時代に削ったと言われている（建立年が刻字されていない）。



漁業 1

沖縄の漁業遺産は魚垣〔ながき〕である。九州に僅かに残っていたのに比べると、沖縄には島嶼部を中

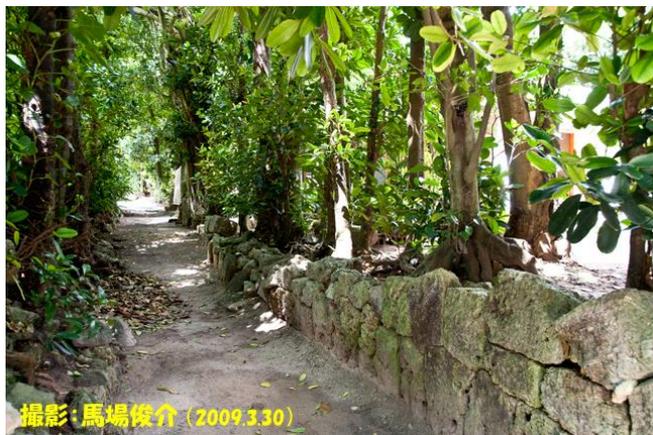


心にかなりの魚垣が現存している。魚垣は、満潮時に垣内に入った魚を、干潮時に1ヶ所しかない出口に網を張って漁獲するための施設で、島出身の琉球王国の女官のために築かれたと伝えられる。小浜島の魚垣（竹富町、琉球王国時代）**A**は、石垣の全長が1200mあるとされ、現存する最大の魚垣である。前ページの写真は、満潮に向かって潮位が上昇し、魚垣が水没する直前の光景である。参考のため、干潮時の白保（笠原）の垣（石垣市、琉球王国時代）**A**の写真を下に示す。



防災1

沖縄本島の備瀬のフクギ(本部町、琉球王国時代、町指定)**A**は、典型的な防風・防潮・防火林である。最も古いフクギは推定樹齢300年程度なので、琉球王国時代に屋敷の防風林として整備されたのが起源とされている。集落の路地の両側にフクギが植えられた独特の景観が延々と続き、観光地になっている。



防災2

島嶼部にある集落で最も見事で観光的にも成功しているのは、竹富島集落の石塀と白砂敷き街路（竹

富町、19世紀以前?、国重伝建）で、珊瑚の石塀や珊瑚砂を敷いた街路が、南国風の集落景観を形成している。石塀は防風と防火のため、白い砂は雨水の浸透性を高くし、夜行性のハブを発見しやすくするためとされている。集落がこのような形になった正確な年代は不明だが、明治23の地図に現在のような区画割の町が描かれているため、明治改元以前であることは確実に考えられている。



防災3

石垣島には「石垣島東海岸の津波石群」として国の天然記念物に指定されている津波石（津波によりサンゴ礁から押し流されてきた石）が5個ある。そのうち4つまでは1771年の明和の大津波によるものだが、崎原公園にある津波大岩（石垣市）**A**だけは、炭素14による年代測定により約2000年前の先島津波による津波石であることが確定している。石にもかかわらず炭素14による年代測定が可能となったのは、陸に打ち上げられて枯れ死したサンゴが付着していたためである。長径12.8m、短径10.4m、高さ5.9mと日本最大の津波石は、周辺にサンゴ礁の軽い岩塊が多い地域故の災害遺産である。

提供:石垣市教育委員会



衛生 1

沖縄を代表する土木遺産は膨大な数の井戸群である。島嶼部はもとより本島にも大きな川がないことから、飲料用・生活用・農業用の安定的な水源は井戸であった。沖縄本島や島嶼部は、泥岩や変成岩などの不透水基盤の上に、数万年以上前に海中の珊瑚や貝殻などが堆積してできた多孔質の石灰岩が載るという地質構造であるが、両者の関係により様々なタイプの井戸が発達してきた。

一番古い方式は、琉球で最も古い歴史をもつ湧水と言われる垣花樋川〔かきのはなヒージャー〕(南城市、先史時代) **A** のように、高台となった石灰岩層の裾野から湧き出す豊富な水をそのまま受けるものであったと考えられる。



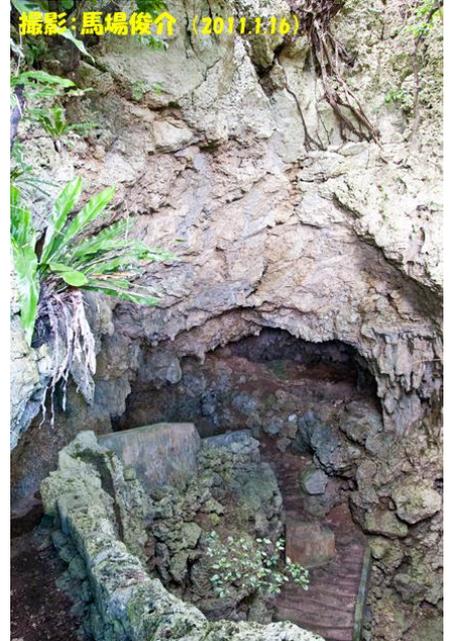
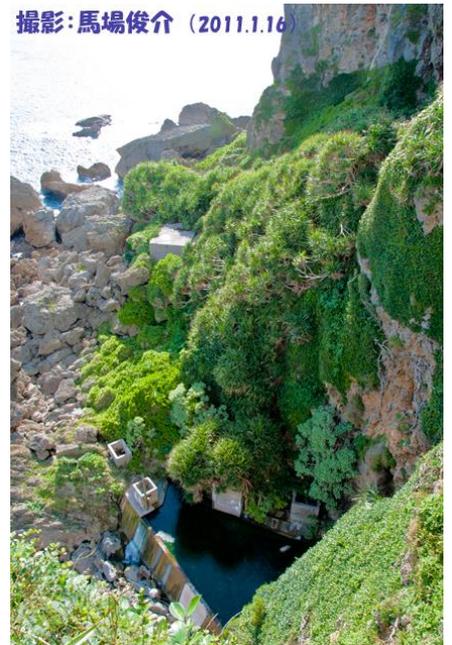
撮影:馬場俊介 (1999.3.26)

市街地における地下水の採取方式は、地下水層まで斜めに切り込み、周囲を石垣で補強した上で、石灰岩層の下部から湧き出してくる水を利用するものである。典型例は金城大樋川〔かなぐしくウフヒージャー〕(那覇市、1694年以前、市史跡) **A** で、コの字型に積み重ねられた3段の相方積み石垣で補強した岩盤の奥の水脈から湧き出した水を、最下部の水盤に導いて利用している。



撮影:馬場俊介 (2011.1.17)

宮古島では、島の中央にできた泥岩の断層に豊富な降水が貯留され、海岸の崖下に流出したり、洞窟内に湧出する状況が数多く見られる。前者の代表がムイガー(年代不詳) **B**、後者の代表が友利のアマガー(1727年以前、県有形民俗) **A** である。ムイガー(上の写真)は高さ約60mの断崖の直下にある水量の多い湧水で、友利のアマガー(下の写真)は降り口から渋滞水層露出面までの深さが約20mと深く、自然洞窟の湧水としては最大級である。



撮影:馬場俊介 (2011.1.16)

伊良部島や多良間島では泥岩と石灰岩の間に「淡水レンズ」状に地下水が溜まり、それがかなりの水



撮影:馬場俊介 (2009.3.28)

源となり得るとされ、井戸も多い。しかし、竹富島のように「淡水レンズ」の規模が小さいと、仲筋井戸〔なーじカー〕(竹富町、年代特定されず) **B**のように、地表面近くにある帯水層に向かって大断面の井戸を掘る方式が採用される(深さ7m)。

防衛 1

沖縄のもう一つの特徴的な土木遺産は火番盛と呼ばれる遠見番所群の存在である。中でも国の史跡に指定された「先島諸島火番盛」が著名で、1644年頃に、薩摩藩の要請により18ヶ所の狼煙台が設けられ、異国船の動向を伝えていた。その最南端にあり、最大規模で残っているのが波照間島のコート盛〔コート・ムイ〕(竹富町) **A**である。サンゴ石を高さ3.9m、径9.9mに積み上げた2層の渦巻き状の構造物である。

撮影:馬場俊介(2009.3.27)



非常駐の遠見台のため文化財指定は受けなかったが、先島諸島火番盛の中で、ピッチェルムリイ(石垣市、琉球王国時代) **A**は、3層の渦巻き状と最大規模で、保存状態も最良の狼煙台である。



撮影:馬場俊介(2009.3.26)

なお、沖縄本島にも火番盛はあり、古宇利火立所(今帰仁村、1644年頃、村有形) **B**が知られている。

その他 1

沖縄で特徴的な3番目の土木遺産が印部〔しるび〕石(ハル石)である。琉球王国の三司官(宰相)・蔡温が、薩摩藩の管轄化で実施した乾隆検地の際に、土地測量に使った図根点が印部石で、本リストには34基が記載されている。盗難が多発したため、近刊の『沖縄の印部石』(2009)では設置場所を明示していない。印部石で一つ例をあげるとすれば、恐らく、うちはら原の印部石「や」(名護市、1737-50年、市史跡) **A**がベストであろう(「や」は、いろはに…の順に付けられた記号)。径1.2mの印部土手が良好に残り、かつ、アクセスも容易である。



撮影:馬場俊介(2009.3.30)

その他 2

八重山諸島には、星の動きと農耕の時期とを結び付けた星見石が5基残っている(1基は保管中)。中で最も典型的とされるものが、小浜島の節〔シチ〕さだめ石(竹富町、1670年代以降、町史跡) **B**である。石には子、丑、寅…と方位を示す12個の小さな穴が穿たれているが、ここに竿を立てて「群星」(プレアデス星団)の方角を調べることで農作物の作付け時期を判断していたとされる。



撮影:馬場俊介(2009.3.27)